大阪城

2023 4/17 (月) 14347 号

全港湾 西成分会

ゴム 6647-4947

震えるような寒さは去った。自然は回転する。今は、過ごしやすい気候だが、向こう5ヶ月ほどは、熱さや熱中症との戦いになっていく。じめじめした梅雨もはさんで熱さにむかうが、今から熱さに耐えよ。歩きぬく身体を少しづつ整え作っていき、夏の峠を越えていきたいものです。

マスクは、個人の判断で自由だ、となってはいてもはずしている人は、地下鉄の中でも、まだ小数だ。汗をかくほど暑くなったり、5/8のウイルスの位置づけが、インフルエンザなみの5類になる節目などが、マスクをなくす力として働いていくのだろうか。

社会も昨日から4/23統一地方選挙、五ヶ所の国政補欠選挙が激しくなっている。しかし、その間にも地球の動きは止らない。仏の大統領が中国へ行き、100機ほどジェット機を売る話をまとめ、アメリカに従うだけではダメだと宣言したり、ブラジルの大統領も中国へ行き、スマホ会社ファーウェイの製品をどんどん使うと宣言している。80歳のバイデンと76歳のトランプのじいさんどうしが政治対立するアメリカは、ぶよぶよの熟し柿のような状態になっている。アメリカと盟主とする G7、5/19広島、先進国(?)サミットも、岸田議長はばしゃいではいるが、エネルギーなど出てくるだろうか。

岸田首相演説中の筒状爆発物は「手製のパイプ爆弾だろう」「火薬は少なかったのでは」銃器評論家

今度は現職総理が標的にされた。15日午前11時25分ごろ、衆院和歌山1区補選（23日投開票）の応援で和歌山市の雑賀崎漁港を訪れていた岸田文雄首相に向け、男が筒状のものを投げつけ、1本が爆発した。男は威力業務妨害容疑で現行犯逮捕された。首相にけがはなかったが、爆発は聴衆の面前で起き、現場は大混乱した。昨年7月、安倍晋三元首相が遊説中に銃撃され死去した事件を機に要人警護は強化されたはずが「教訓」は生かされず、5月のG7サミットを前に大きな不安を残した。　◇　◇　◇

岸田首相の演説会場で起きた事件で爆発した筒状のものについて、銃器評論家の津田哲也さんは「手製のパイプ爆弾だろう」とみている。威力については、映像で見る限りの音の大きさや白煙の量から「火薬の量は少なかったと思う」。

一般的なパイプ爆弾の作り方の難易度については「銃は弾を飛ばしたり、強度も必要だが、それよりも簡単に作ることができる」とした。今回、投げられてから爆発まで数十秒のタイムラグがあったことについては、一般的には「遠隔操作で爆発させた可能性もある」とも指摘した。過去には、クギや金属片などを入れて殺傷能力を高めた事例も多い。今回の爆発物がどのような性能、構造だったのか、今後の捜査が注目される。　[2023年4月15日日刊スポーツ

昨年の安倍元首相の暗殺を実行した山上哲也当時41歳。「いまの若い世代はなに考えているのだろう?」と思っていたのですが、今度は24歳の男。日本社会がどんどん壊れてきているような気がします。